

基底にあるもの

小田 実



基底にあるもの

小田 実

筑摩書房

基底にあるもの

一九八〇年九月二十五日 初版第一刷発行

著者 小田 実

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 〇三—九一—五五(営業)

〇三—二四—六二(編集)

振替 東京 六一四二二三

多田印刷 積信堂

装釘 玄順恵

基底にあるもの

目次

はじめに

基底にあるもの

3

I 人びとにかかわる

天下国家のこと、人間のこと——堺利彦と彼の『家庭の新風味』について——
共通一次試験

32

ニューヨーク市バウエリイ街'76・その他

37

「体験」を伝えることは困難だが「体験」を学びとることはできる
土俵をつくりなおす

53

47

23

Ⅱ 世界にかかわる

テンノウヘイカよ、走れ 67

日本人と朝鮮人 87

朝鮮を全体としてとらえること 96

息子たちがやって来た 103

対話について、ことばについて 131

誰の眼にもあきらかであるはずのこと 144

オリンピックと安保と予備校と 154

Ⅲ 文学にかかわる

「現在」を書くこと——李恢成『見果てぬ夢』にかかわって——

「表現を奪われる」「表現を奪う」 178

「詩心」と「小説心」 197

アリストテレスとロンギノス——「文強」の修辞学 221

現実をどう書くか 240

「生き永らえる」力・あるいは、革命について——悼武田泰淳 260

中野さんへの注文 263

ジェイムス・ジョーンス追悼 267

地理通りの作品 271

「市民文学」を考える 275

戸村一作さんの絵のこと、「日本の伝統」のこと 290

「大阪の作家」の話から 292

おわりに

「コロノスのオイディプス」

321

あとがき

349

はじめに

基底にあるもの

1

私がものを知るとはどういうことかを自分なりに熱心に考えるようになったのは、三年前、「北朝鮮」——朝鮮民主主義人民共和国へ行ったときからのことだ。もともと、この私の自分自身に対する設問には、そこへの三週間の旅はじかにかかわってはいない。設問のもととなったのは、若い在日朝鮮人の知人（かりに名前をAとしよう）の「行って、祖国のいいところもわるいところも見えて欲しいんです」という行くまえのことば、というよりはたのみだった。そのたのみには、祖国のことを知りたいというある痛切な思いがこもっていた。普通なら知っていて当然のことを知ることができないでいるというもどかしさもそこにあれば、日本人であるあなたが行って、自分に行くことはできないという悲しみ、怒りの気持もあきらかにあった。そのすべてで、見て来て、見たことをしゃべって欲しい。わたしは祖国のことを知りたいのだから。そう彼女（Aは女性だった）は言っていた。

Aが祖国について無知な女性であったというのではない。朝鮮総連がたてた「民族学校」の出身者で、朝鮮のことは「北朝鮮」と言わず韓国と言わず、よく勉強して知っていた。朝鮮語も「民族学

校」に小学校の段階から行っていたのでよくできた。日本語も日本の社会で育って何不自由なかったから、彼女のような場合がまさに「バイリンガル」というべきものだろう。祖国のことばもしっかり体内にあったせいか、これは「民族学校」教育のひとつのかくれもない成果だと言えるが、まぎれもなく朝鮮人として自分を認識しているようだった。私は彼女から、「北朝鮮」と言わず朝鮮全体についてよく教えてもらっていた。

そのAがそんなことを言う。そのことば、いや、たのみは私をおどろかせたが、しかし、うなずいた。見るかぎりのものは見、知るかぎりのものは知るつもりだ。私はそんなふうな意味のことを言った。

三週間、彼女のそのことば、たのみもあって、たしかに懸命にいろんなものを見て歩いた。知識もかなり身につけた。それから帰って、私の見たかぎりのこと、知ったかぎりのことを彼女に告げ、書きもした。

2

私が書いたことはすでに『私と朝鮮』（筑摩書房）のなかにおさめたのでそちらを見ていただきたい。その私の見たこと、知ったことの当否をここで論じようとしているのではない。ここで書きたいのはこの文章のはじめに書いた、ものを知るとはどういうことか——そのことだ。それを彼女のたのみにかわらせて考えてみたい。

私は今さっきAは「北朝鮮」についてよく勉強している女性だと書いた。実際、そのもろもろについてよく知っていた。そのよく知っている女性に私の知ったかぶりの知識を告げるのは奇妙な話だ。その奇妙なことをあえてしなければならない必然（は今の政治のありようからかたちづくられている）については彼女のことばが十分に説明してくれているにちがいない。もちろん、たった三週間の

旅のことだ、彼女が訊きたかったことでこちらが答えられないことも多々あった。私が現地で知ったことを彼女がすでに本で知っていたのも数多くあった。それから、やはり、本で読み、学校で教えられて来たことでは十分でないこともたしかにあって、彼女の知識の不足を私がおぎなうてやる事ができた。

Aが祖国について知ろうと必死になっていたのは、知識を体内にたくわえて、「北朝鮮」についての知りなろうとしたためではない。あるいは、日本における自分のもろもろのために使おうとしたためではない。目的は、口にそうとあからさまに言っていないが、はつきりしていて、それはそうすることで朝鮮人になる、すくなくともより確固とした強いかたちでそうあるためだった。

なるほどそういうことかと納得できたのは実は「北朝鮮」から帰って来て、彼女の質問責めにあつていたときだ。彼女ぐらいしっかり朝鮮人を体内にもっていると思られる在日朝鮮人でもそうなんだなとウカツなことにやっとそのとき判った。それから、ものを知るとはどういうことか、考えるようになった。

3

Aには老いたる両親がいるが、彼らはさつきちょっとふれたように在日朝鮮人の「一世」だ。朝鮮に生まれ、育って、日本に来了。もうそれで五十年になるという話だが、彼らの場合ね、つからの朝鮮人として日本に来て、日本でくらしして来たのだが、どこへ行こうが、どこでくらそうが、彼らが朝鮮人であることは自他ともに自明のことからであり、そこにおいてなんのゆらぎもない。Aに電話をかける時、ときどき両親が出て来るが、彼らの日本語は誰が聞いても朝鮮人の日本語だ。それに対して、Aの日本語は誰が聞いても日本人の日本語だろう。そして、Aの場合、ほとんど完全に近い「バイリンガル」で、朝鮮語のほうも誰が聞いても朝鮮人の朝鮮語だ。

Aの老いたる両親の場合、彼らの「朝鮮人性」の根になる朝鮮はそこに生まれ落ちたときからまわりに自然に存在している朝鮮で、その朝鮮をとらえてわがものとして朝鮮人としての自分をきずき上げるために、べつに朝鮮を「知る」必要はないにちがいない。ちよつとキザな言い方をすれば、彼らが朝鮮を知るのではなく、朝鮮が彼らを知るのであつて、朝鮮は彼らの誕生を知るとともに容赦なく彼らの内部に侵入を開始するのである。そこで彼らの自由選択はきかないし、逆に朝鮮を知るために彼らはべつに努力をする必要もない。ただ、朝鮮人でありさえすればよいのだ。

Aの場合はまさにそのところが逆になっているように見える。朝鮮は自分からはるかかけ離れたところであり、彼女をとりまくものは日本という異質の環境であつて、そこで彼女が朝鮮人であるためには、まず、なんとしてでも朝鮮を知り、その「知る」という行為によつて朝鮮を自分の体内にとり込んで行かなければならない。こんなふうを考えれば、彼女と彼女の老いたる両親とは、朝鮮を「知る」とことと朝鮮人で「ある」ことがまさに逆の関係になっているのが判るだろう。両親の場合、「ある」が「知る」に先行している。Aにあつては、「知る」ことが「ある」ことを指向している。「知る」という行為——運動がまずあつて「ある」という存在が出て来る。両親の場合は、もちろん、そこが逆になっている。

4

「ある」という存在の様態はそれなりに安定しているにちがいない。朝鮮人であることにおいて、Aの老いたる両親はゆらぎがないのだ。朝鮮を「知る」という行為についても、たとえ、その積極的な行為がそこで行われていなくても、彼らは朝鮮のことは、そんなことは、今さら知ろうとしなくても生まれたときから「知っている」ということになるにちがいない。「知る」は「知っている」に自然に移行して、運動よりも存在の様態を示している。朝鮮人で「ある」から朝鮮を「知っている」——

二つの存在が確固として彼らの体内にある。そこで彼らの「朝鮮人性」にゆらぎがない。

Aの場合はそうはいかない。逆のことになる。

「知る」という行為は本質的に運動であって、安定を欠いている。しかも、この運動にはかぎりがない。朝鮮を「知る」は朝鮮人で「ある」にむかって動くが、「知る」行為に限度がない以上、「ある」はいつでも不安定なものになる。朝鮮のことを知っても知っても、自分が朝鮮人で「ある」ことに不安は残る。逆に「知る」行為をやめれば、たちまち私たちは朝鮮人であっても内実は朝鮮人でないことになりかねない。Aの老いたる両親の場合、「知る」という運動は「ある」にひきつけられてほとんど「知っている」という存在になった。Aの場合、「ある」は「知る」にひきつけられて運動の態を呈する。

5

もちろん、「朝鮮人の血」ということはある。「朝鮮人の家庭」というものもある。しかし、そのなかにも外部の日本は容赦なく侵入して来る。それは、朝鮮生まれ、朝鮮育ちのねづからの朝鮮人（Aの家庭では冗談まじりにそういう朝鮮人のことを「国産」と呼ぶ）である老いたる両親のひきいるAの家庭を見ていると判ることだ。なるほどAは朝鮮語がよくできるが、それが両親がほとんど朝鮮語でしゃべっているという家庭のせいでないのは、他の兄弟姉妹たちにはほとんど朝鮮語ができないのが何人かいる事実で判ることだろう。彼女が朝鮮語ができるのはAが「民族学校」へ行き、そこで朝鮮語を知り、懸命に勉強したからだ。それは「知る」行為の結果であって、決してはじめから「ある」ものとして彼女の体内にあったわけではない。逆に、彼女の日本語はべつに彼女は勉強したわけではなかった。それは生まれ落ちたときから容赦なく彼女の内部に侵入して来るものとしてあって、いわば、はじめから彼女は日本語を「知っていた」。

彼女の老いたる両親が生まれ故郷の済州島にしばらく帰っていたことがあった（ここで、この文章主題とは直接かわりあひはないが、Aの家族の「国籍」構成についてふれておきたい。「知る」と「ある」との関係についてのAの健気な努力もその「国籍」構成の複雑さのなかで行われていることに留意しておきたいからである。彼女は、日本政府の便宜的分類に従えば「北朝鮮」系朝鮮人だとみなされている「朝鮮籍」の持ち主だが、数多くいる彼女の兄弟姉妹には自らの意志、思想、都合にしたがって「朝鮮籍」「韓国籍」双方がいる。両親はその墓参のため、「朝鮮籍」を「韓国籍」に切りかえた。もっとも両親にしてみれば、彼らが生まれ、育った朝鮮は「南北」の区別などなかった、全体として日本に支配されていた朝鮮で、そんな区別などあとからつくられたものだということになるにちがいない。Aの姉のひとり、他の兄弟姉妹同様日本生まれの、日本育ちだが、自らの意志、思想に基づいて、身よりの誰ひとりない「北朝鮮」に十七年前に高校生の身で単身帰国している。その墓参での両親がいなくなったときのさびしさをAは次のように表現していた。「家から朝鮮がいなくなったみたいでさびしい」。

6

もちろん、朝鮮を「知る」という行為は朝鮮が「ある」という存在を前提にしている。ことばを変えて言えば、「知る」朝鮮は「ある」朝鮮からかたちづくられるものだ。そんなことは自明の話だが、ただ、「ある」朝鮮は「知る」朝鮮となってそこで終るわけではない。私の場合はそのことですくなくとも朝鮮にかかわっては終りだが、Aの場合、彼女はその過程によって朝鮮人になろうとするのだから、過程の回路は閉じられないで朝鮮にむかって開いている。ただ、その朝鮮は自分の「知る」対象となった「ある」朝鮮ではなく、自分の朝鮮人としてのこれからの存在、生き方がそこに込められているゆえに未来にむかって開かれた「あり得る」、さらにもう一歩進めて「あるべき」朝鮮であるにち

がない。彼女はそのことのありようを、「祖国」ということばは、ただの「故国」とはちがつて、自分のこうあれかしと希う気持が込められたことばだとうまいぐあいに説明していた。「故国」はたしかに故郷と同じように過去をむいていることばで、それは所与の存在としてすでにあるもので、こちらからどうしようという筋合いのものではないにちがいない。それに対して「祖国」は、もっと未来に可能性として開かれていれば、空間的に横に人びとひとりひとりにも開かれていて、「祖国」というとき、人びとは多かれ少なかれそこに「参加」する自分を感じている。

そして、もうひとつ、大事なことがある。その「祖国」はこの一連の過程のはじまりにあった「故国」にくらべていちだんと高いところにたっている。ということとは、そこに「参加」している人びともいちだんとはじめのときよりも高みにたっているということだろう。私はAのことばをそんなふうに聞いていた。

7

究極の「あるべき」朝鮮としての祖国がそんなふうにしていちだんと高みに立つことで、Aの「ある」「知る」「あり得る」「あるべき」という一連の過程は次第に高みへ上昇して行く過程としてあると見ることができると。究極の「祖国」——「あるべき」朝鮮が一連の過程を高みに引き上げて行くのである。

ここで念のために、高みへ昇りつめて行く過程だからと言って、ひたすらなる賛美から始まってその極致に至るという過程ではないことをこゝわっておきたい。「北朝鮮」を賛美する文章のなかには往々にしてそういうのがあるが、Aの過程はそうした「北朝鮮」自体を本質的なところで馬鹿にした過程でないことはAの名誉のために言うておこう。究極のところでは彼女が考える理想の「祖国」が高みにあることは話をしていると感じとられて来て、それゆえに過程のはじまりの「ある」朝鮮に対し